

信 毎 俳 壇

神野 紗希 選

幾度も川は名を変へ豊の秋
(松本市) 久我 綺乃
爽やかや露硬き揺り木馬
(中野市) 風間 陽介
草の実にまみれ老獣斃死せり
(大町市) 原田 勝
ストックホルム症候群の君へ梨
(小諸市) 加藤 陽介
摘まみ菜の湯揚げは細き紅はしる
(上田市) 斎藤 俊樹
ちちる虫農家に土間が在りしころ
(中野市) 川 寿男
ひつち田の羽化するとき青さかな
(飯山市) 田 琢雄
水澄むや焼入れの鎌ジュツと鳴き
(須坂市) 富田 孝弘
ただ一度栗鼠訪ひし庭秋の草
(飯綱町) 坂井 寿男
淡紅のカクテルに解け酔芙蓉
(宮田村) 金本 牧子
善光寺煙たぐりて秋日和
(小海町) 井上とみ子
野仏の顔のつべりと秋の風
(大桑村) 木戸口信幸

一句目、千曲川が新潟では信濃川と呼ばれるように、川は名前を変え、土地の暮らしに沿う。川と水田の広がる風景の豊かな眩しさ。水は稲を育て、実りをもたらすのだ。二句目、しなやかに風になびく

も、木馬のそれは彫られて硬い。とはいへ、木の肌の優しさが手にうれしく、大気が澄む「爽やか」の気分と通い合う。三句目、自然の懐に天寿を全うする獣に心を寄せた。草の実が素朴に死を包む。

坊城 俊樹 選

横たはる案山子や立ち止まる戦車
(塩尻市) 神戸 千寛
やり直し何度も出来る文化の日
(長野市) 中沢 義寿
天高しデユブランティスの世界新
(辰野町) 増沢 眞山
小さな秋五匹硬貨に見つたり
(大町市) 原田 勝
鱈雲共に東へ向かう道
(佐久市) 町田ゆかり
電灯がボツリボツリと刈田道
(大町市) 丸山めぐみ
無限とは如何なることか星月夜
(安曇野市) 中山 一孝
錦秋や狼が見送る山の駅
(長野市) 飯森 泉
漁火を水平線に星月夜
(佐久市) 吉岡 徹
車過ぐ割れる胡桃と寄る鴉
(長野市) 清水美佐子
赤とんぼは見えてゐるのね秋の風
(長野市) 北沢 京子
小鳥来る手ならひ帳の母十九
(飯山市) 田中 琢雄

一句目、これはどこの戦場なのか。この光景には既視感がある。かつて外国の内戦で反戦の若者が戦車の前に横たわった。戦車はそこに立ち止まる。しかしこれは案山子だ。この飛躍こそ俳諧味の極

致。二句目、その通りとしか言いようがない。皆懸命に何度も失敗してその日を迎えるのだから。三句目、先日棒高跳びの世界新を出した若者のことか。彼こそ高き天空を高く舞う鳥人であった。

今井 聖 選

禾偏から虫偏となり秋深む
(佐久市) 小山 嘉章
上野発最終あさま稲刈りへ
(長野市) 勝山 学
芋虫に柑橘の香の立ちにけり
(佐久市) 木内利一郎
赤蜻蛉の赤やえやえと下山かな
(飯綱町) 小林 紀子
茸狩や仲間ひとりも口にせず
(長野市) 中沢 義寿
帳面の端に夜長の詩を綴る
(須坂市) 富田 孝弘
天高し円を掲げて投網打つ
(松本市) 中村 百仙
栗狙ふ狼に届かず石礫
(大桑村) 木戸口信幸
人前を嫌ひ隠るる狸かな
(佐久市) 西田 和彦
自らを貶めるなど彼岸花
(大町市) 丸山めぐみ
退院日窓辺に二羽の鶺鴒来
(佐久市) 赤岡 厚子
爽涼の朝の目玉焼つぷら
(須坂市) 清水 章

一句目、稲穂の穂などを表す禾偏の文字から虫偏の文字が増える印象で秋が深まる。見事で新鮮な機知の句である。二句目、上野発下り最終に乗り、稲刈りの手伝いに行く。句に理知的な構成が見ら

れる。三句目、一般的には嫌われる対象に芳香が漂ってくる。作者は嫌われ者にも優しいのだ。四句目、「下山かな」が一句の核。人の動きがあって初めて季語の動きや色が生きてくる。

選 評